



第3回 （仮称）平和資料館開設準備懇話会

日 時：令和2年8月26日（水）

13：30～15：30

場 所：小倉リーセントホテル（2階）

「玄海の間」

次 第

1 開 会

2 報 告

（1）第2回懇話会における委員の主な意見 等

3 議 題

（1）コンセプト等に基づく展示内容の整理について

（2）（仮称）平和資料館の管理・運営について

4 事務連絡

（1）次回日程について

5 閉 会

(仮称) 平和資料館開設準備懇話会の目的・進め方について

1 目的

戦後70年以上が経過し、戦争を知らない世代の方がほとんどとなる中で、戦争の記憶が風化していくことが懸念されている。

そこで、市民に戦争の悲惨さ等を後世に伝え、平和の大切さ、命の尊さを考えるきっかけとするため、(仮称) 平和資料館の建設に向けた取り組みを進めている。

資料館開館に向けて、自主事業や管理・運営体制等、「ソフト」について、具体的な検討が必要である。

そこで、専門的な見地からの意見も聴取する「(仮称) 平和資料館開設準備懇話会」を開催する。

2 開催期間

令和元年8月～令和4年3月（4回程度）

3 懇話会の進め方（意見聴取事項）

開催日等	意見聴取事項
(令和元年度) 第1回：8月27日（火）	○（仮称）平和資料館基本計画・実施設計 ○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・プロローグ（導入展示） ○館の自主事業（展示以外）
第2回：1月30日（木）	○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・戦前の北九州 ・戦争と市民の暮らし ○館の管理・運営（ボランティアの導入）
(令和2年度) 第3回：8月26日（水）	○コンセプトに基づく展示内容の整理 ・空襲の記憶 ・運命の昭和20年8月8日・9日 ・戦後の復興 ・エピローグ 等 ○館の管理・運営（戦時資料の収集）
第4回：未定	○これまでの振り返り

4 懇話会後の取り組み

懇話会の構成員の意見を参考に、自主事業や管理・運営体制等をまとめ、事業計画を作成する。

（仮称）平和資料館開設準備懇話会構成員名簿

1 構成員名簿

氏 名	所 属 等
後藤 みな子	一般社団法人 北九州文学協会理事長
◎ 近藤 倫明	北九州市立大学名誉教授
佐方 はるみ	九州女子大学人間科学部特任教授
篠崎 桂子	長崎原爆資料館館長
戸高 一成	呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）館長
凧 恵美	松永文庫 室長代理
○ 羽田野 隆士	北九州商工会議所 専務理事
吉水 請子	極東ファディ株式会社 取締役

◎座長 ○副座長

（敬称略・50音順）

2 市側名簿

氏 名	所 属 等
高松 浩文	総務局長
末吉 和久	総務局総務部長
田爪 康隆	総務局平和資料館担当課長

【事務局】

総務局総務課（平和資料館担当）

【会議運営委託業者】

株式会社トータルメディア開発研究所

報告

第2回懇話会における委員の主な意見等

(説明資料)

- ・ 第2回懇話会における委員の主な意見等
- ・ 第1回・2回懇話会での委員意見の整理（たたき台）

第2回懇話会における委員の主な意見等

■報告：第1回懇話会・市議会等からの意見について

（非核平和都市宣言の展示について）

- ・資料館では、戦時下の暮らしなど幅広いテーマにした展示を通して、来館者が当時の人々の苦労などを学び、戦争を繰り返さないように考えることが大事である。宣言は大事だと思うが、大きく取り扱えば展示テーマが狭くなる。
- ・展示の議論の途中であり、委員がひと通り展示内容を把握した上でどのように展示するかを検討した方がよいのではないかと。資料館は宣言のための施設ではないので、展示場所などは慎重に検討すべき。

（資料館の自主事業（集客等）のまとめについて）

- ・長崎県の小中学校は無料で、原爆資料館を年に1回は見学するように、教育委員会とも連携している。地元の皆さんに来ていただくことが大事と考えている。
- ・「SDGs」と関連付ける展示があれば、英語で伝えることで、現代的な意味が広がるのではないかと。インバウンドの対象を英語圏に持っていくという発想もあるのでは。
- ・自主事業のたたき台では、「学ぶ」という言葉を多用されている。子どもたちは「学ばなくてはいけない」かもしれないが、館のコンセプトは「伝える」なので、大人には、「知る」とか「出会う」に置き換えれば、事業の内容等が変わってくるのではないかと。
- ・資料館一帯をアートな雰囲気や静かでほっとする空気感を醸すエリアに創りあげる。8月になるとライトアップして、カップルで訪れたい空間づくりで、雰囲気に惹かれて、資料館に迷い込み、平和について知るといった流れもある。
- ・子どもたちの社会勉強や修学旅行に役立てる静かさと、まちの賑わいの構築とで考えると、資料館は来た人たちに静かに観てもらいたい所ではないかと。

（展示の考え方について）

- ・展示を見てもらうための工夫が必要。子どもには学んでもらう、大人には関心を持ってもらう、若い人たちには自分たちの問題ととらえてもらえるように、まずは多くの人に発信できればいいのでは。
- ・若い人には被爆者の話は伝わりにくい。気持ちは伝わっても、戦時中の食事の状況などが理解できないため、時代背景が分かる漫画などを使って、訴えていけばいいと思う。
- ・長崎には、アジア系の方が多く来るが、長崎は壊滅的な被害を受けたのに、どのようにして、これほど復興したのかと聞かれる。北九州も空襲で被害に遭い、大変な努力をされて、復興されたと思うので、紹介できればと思う。
- ・戦争の被害だけに注目するのではなく、北九州は空襲に遭い、戦後は4大工業地帯と言われるほど復興したところに脚光を当てるのが、子どもたちにとっての未来志向になる。
- ・資料館は、歴史的な事実を留め、何が悪いのかを考えるきっかけになる場所となる。重要なことは、この地に資料館がある事の意義を体現できる形をつくる事である。

- ・原爆資料館の展示には、戦前の歴史は入れているが、色んな意見や説があり、検証されているものもあればそうでないものもある。教科書に合わせているが、教科書の内容も変わることもあるので、慎重にやっていかなければならない。
- ・資料館では、北九州の当時の事実を理解でき、それが、現在にどう繋がるかを考えることになる。資料館には、10年後、10年間のものが蓄えられる。その観点から考えると、実際にどのように運用するかが大きな課題になる。

■議題：コンセプト等に基づく展示内容の整理について

①（仮称）平和資料館実施設計「プロローグ」（修正案）

- ・「原子爆弾が広島と長崎に落ちて、小倉には落ちなかった」ことをはっきり説明する必要がある。ひと目見て伝わるキャッチコピーがあれば、ターゲットも広がる。
- ・入ったところで何を訴えたいのかというのは大事である。長崎では、原爆投下から戦争などで核兵器が使われていない事実をふまえ、原爆が投下された11時2分の時計を展示して「長崎を最後の被爆地に」というメッセージを出している。小倉の位置づけの表現は難しいが、訴えたい事を最初に示すのもひとつのアイデアである。
- ・「戦後何十年」という言い方をするが、実際には現実で起こっており、危機はすぐ隣にあるという意識を持たせるメッセージは、重要な伝え方ではないか。過去の出来事でも時間軸で離れていない事も含めた形で表現するとより伝わりやすい。
- ・資料館のコンセプトの中の重要なところは「長崎に落ちたけどもその前に小倉が候補地になっていた」ということであり、小倉に資料館をつくる意義がある。
- ・資料館で「小倉はそういう場所だったのか」ということに気づけば、「学び」は始まる。だからどうするということはそれぞれ受け手が、そこで考えていく。歴史の事実としてのシンボルという形のものがここにあるという存在自体をやっていく事が必要。
- ・展示を通して、「小倉にもこういうことがあった」「兵舎もあった」「空襲があった」「こんな暮らしをしている中で、長崎に飛行機が飛んで行って資料館の史実が起きた」と、点と点が繋がって行く。思考が繋がった状態で、長崎の平和講習に参加するのと、何も知らないで行くのとは、学びの深さが全く違う。

②（仮称）平和資料館実施設計「戦前の北九州」・「戦争と市民の暮らし」

- ・小倉陸軍造兵廠というものを、子どもたちに教える時に、当時、全国に造兵廠はどのぐらいの数があるか、そのうちのひとつが小倉にあるということも紹介してはどうか。
- ・プロジェクションマッピング等とは別に、唯一現物の本物を見せるというのはこの「戦争と市民の暮らし」のゾーンであり、現物の説明をし過ぎて、伝える、知ってもらおうというよりも、静かにそれを見て考えてもらうようなスペース。このように、資料館の中にもメリハリのつくゾーンというのがあっていい。
- ・長崎では、被爆資料を見て感じてもらうように、キャプションなどを少なくして、必要であればスマートフォンで補足をしている。
- ・実物資料の中には、見て分かるものと、分からないものとが混在している。日用品を単に置いているのではなく、どのようなものであるかを想像させるような工夫が必要。

■議題：「(仮称)平和資料館の管理・運営について

- ・展示解説のボランティアの導入は望ましいが、運用は難しい面もある。研修を行っても、どうしても、その人の主観が入る。慎重に検討すべき。
- ・施設の管理については、施設によって考え方も違うので、どう活用するかは、これから全体像の中でボランティアの運用規定を示さないといけない。
- ・平和学習では、子どもたちに事実を伝えることが必要なので、教育的立場での説明は、専門性のある学芸員や職員が行うべき。
- ・長崎市でもイベントの手伝いとか、他都市から来られた人たちの案内を行っているが、大人とか被爆者のボランティアの場合は、研修しても、案内している時に自分の考えを言われることでトラブルが起きることがある。
- ・ボランティアの活用は若い人の育成ということなら、子どもたちに影響がない程度の範囲であればいいのでは。
- ・ボランティアには、いろんな思いで集まっているので、管理する側が、「できること」「できないこと」に分けて、影響のない形に整えてからお手伝いしてもらうのがいい。
- ・ボランティアも色々な形があり、実際にどういう風にやるのかといえば、「難しい」という話もあり、すぐに答えが出るような課題ではない。

【参考：市議会からの意見（４月）】

北九州市非核平和都市宣言が出されたことによって、平和資料館建設に至ったと認識しており、大きなコンセプトだと考えている。

世界では、2017年に採択された核兵器禁止条約の批准が今、発効に必要な50か国の7割に達している。

本市も行った被爆者国際署名は全国の7割以上の自治体の人が署名し、1千万人を大きく超えた。また、核兵器禁止条約の調印、批准を求める自治体決議も448に達している。

このような世界の非核の枠の展示の中に含めていただき、非核平和都市宣言の取扱いの検討をお願いしたい。

第1回・2回 懇話会 議題:資料館の自主事業(展示以外)についてのまとめ(たたき台)

区分		懇話会での意見(概要)	懇話会を受けての方向性・事業(議論たたき台)	
			方向性	考えられる事業
自主事業(展示以外)	子どもから大人まで学びを深めるための取り組み	○小学生が自分で興味をもって来るというのはあまりないので、学校として来ることが大事。 ○大人にはアピールの強いものをもっていかないといけない。 ○独自性を出すため、SDGsと連携させることも必要。 ○戦争映画の上映、戦争文学や地元に関するものの読み聞かせ、食のイベント、様々なことを行う姿勢が大切。 ○独自性を活かし、来館者がそれぞれの立場で学ぶことが必要。 ○多くの人は1回しか来るチャンスはない。そのチャンスを逃さず、興味を掻き立てるものを与える。 <u>○「学ぶ」以外にも「知る」、「出会う」という言葉に置き換えれば、事業内容等も変わってくるのではないか。</u> <u>○「SDGs」と関連付けた展示が最後にあれば、英語で伝えることは現代的な意味が拡がる、インバウンドの対象を英語圏にも広げることになるのではないか。</u> <u>○若い人は、被爆者の気持ちは伝わるが、当時の状況等は理解できない。時代背景が分かる漫画等で訴えたいけばいい。</u>	○独自性を発揮しながら、来館者の学びを支援する。 ○展示テーマを踏まえ、幅広い興味に対応するイベント等を企画・実施する。 ○SDGsの取り組み等、子どもたちの学校での学習と関連する題材を取り上げ、子どもたちの学びを深める。 <u>○来館者の世代等に応じて、講座の趣旨や内容等を整理し、企画・実施する。</u> <u>○SDGsの展示は、インバウンドの視点を踏まえ、英語圏を含め、国際的な発信を行う。</u> <u>○対象者にとって分かりやすい、効果的な手法を用いる。</u>	【学びを深める・戦争の記憶を伝える取り組み・集客】 ○戦争体験者の声を聞く講演会の開催 ○漫画等を活用した子供向けの生活体験講座 ○学校の学習と連携した企画講座 ○幅広いテーマによる地域の歴史講座 ○近隣の歴史・文化施設との共同展示 ○近隣で開催されるイベント等との連携 ○地元企業との共同展示 ○他都市の類似施設との共同展示
	近隣の施設や学校等との連携による来館者の確保のための取り組み	○教育委員会と連携して、子ども達が一度は足を運ぶということは、短期の目標ではないか。 ○戦争の時代の背景を持った漫画雑誌や広告のチラシなど、子どもにアプローチしやすいものが特別展示では重要。 ○近隣の文化施設と連携する形が、理想的にできる場所。 ○多くの人に来てもらうことが評価となれば、産業観光と組み合わせることになると思う。 ○できるだけ入れ替えのある建物にしてリピーターに来てもらう。観光ということも意識する必要。 ○他都市の施設との情報交換も必要。 <u>○資料館一帯をアートな雰囲気等を醸すエリアに創りあげる。雰囲気に惹かれて、資料館に迷い込むという流れもある。</u>	○資料館での平和学習や戦時下の歴史・文化・芸術等に関するフィールドとしてのプログラムを準備するため、学校や歴史・文化施設との連携を図る。 ○調査・研究成果を反映させた常設展示リニューアルや特別展示を実施する。 ○特別展示は、子どもたちの興味や関心のあるテーマで実施し、地域の歴史を学ぶ気持ちを喚起し、学校での学習の効果をさらに高める。 ○観光振興の視点から、近隣の歴史・文化施設以外にも商業施設等との連携を図る。 <u>○資料館周辺の環境等を活かしただれもが訪れたいくなる施設イメージづくりを図る。</u>	○他都市の修学旅行誘致 <u>○周辺施設ライトアップ等との連携</u> <u>○周辺施設の紹介と併せた記念碑等の紹介(マップ作り)</u> <u>○SDGs関連事業の展開(関係部局との連携)</u> 【広報】 ○報道機関(新聞・雑誌)への情報提供 ○市政だより等の広報媒体を活用した情報発信 ○ホームページ、広報紙を活用した情報発信 ○学校(教員を含む)への情報提供 ○子ども向けの資料館パンフレットの作成 ○観光客向けの周遊マップ(多言語対応)の作成 ○商業施設等でアウトリーチ展示・講座の実施
	活動や魅力等を発信するための取り組み	○純粋に広報を考える専門的な知識を持った人間が必要。 ○誰に発信するというのを設定して、細やかな活動にリンクした広報を行っていくことが大切。 ○幅広い世代に、この地に資料館がある意味をどう提示するか。 ○異業種と連携し、売込むという大局的なコンセプトも必要。 ○マスコミにも継続して取り上げてもらう必要。	○対象者に応じて、効果的な手法を用いた広報を行う。 ○外部連携を活かした広報を行う。 ○イベントの案内だけでなく、資料館の魅力等も発信する。	
	ボランティアの活用	<u>○展示解説のボランティアの導入は望ましいが、どうしても、その人の主観が入る。慎重に検討すべき。</u> <u>○平和学習で子どもたちに事実を伝えることが必要なので、教育的立場での説明は、専門性のある学芸員や職員が行うべき。</u> <u>○ボランティアは若い人の育成ということなら、子どもたちに影響がない程度の範囲であればいいのでは。</u> <u>○管理する側が、できること、できないことをきちんと分けて、お手伝いいただくのがいい。</u> <u>○施設の管理・考え方も違うので、ボランティアの活用は、運営の全体像の中で運用規定をしっかりと示さないといけない。</u>	<u>○資料館で行うボランティア活動を整理するとともに、若い世代の活用も踏まえ、導入について研究する。</u> <u>○ボランティア活動が与える来館者への影響等も踏まえて、運用規程を整備する。</u>	○若い世代を対象とした地域人材・ボランティア養成講座

議題（１）－１

コンセプトに基づく展示内容の整理について

（説明資料）

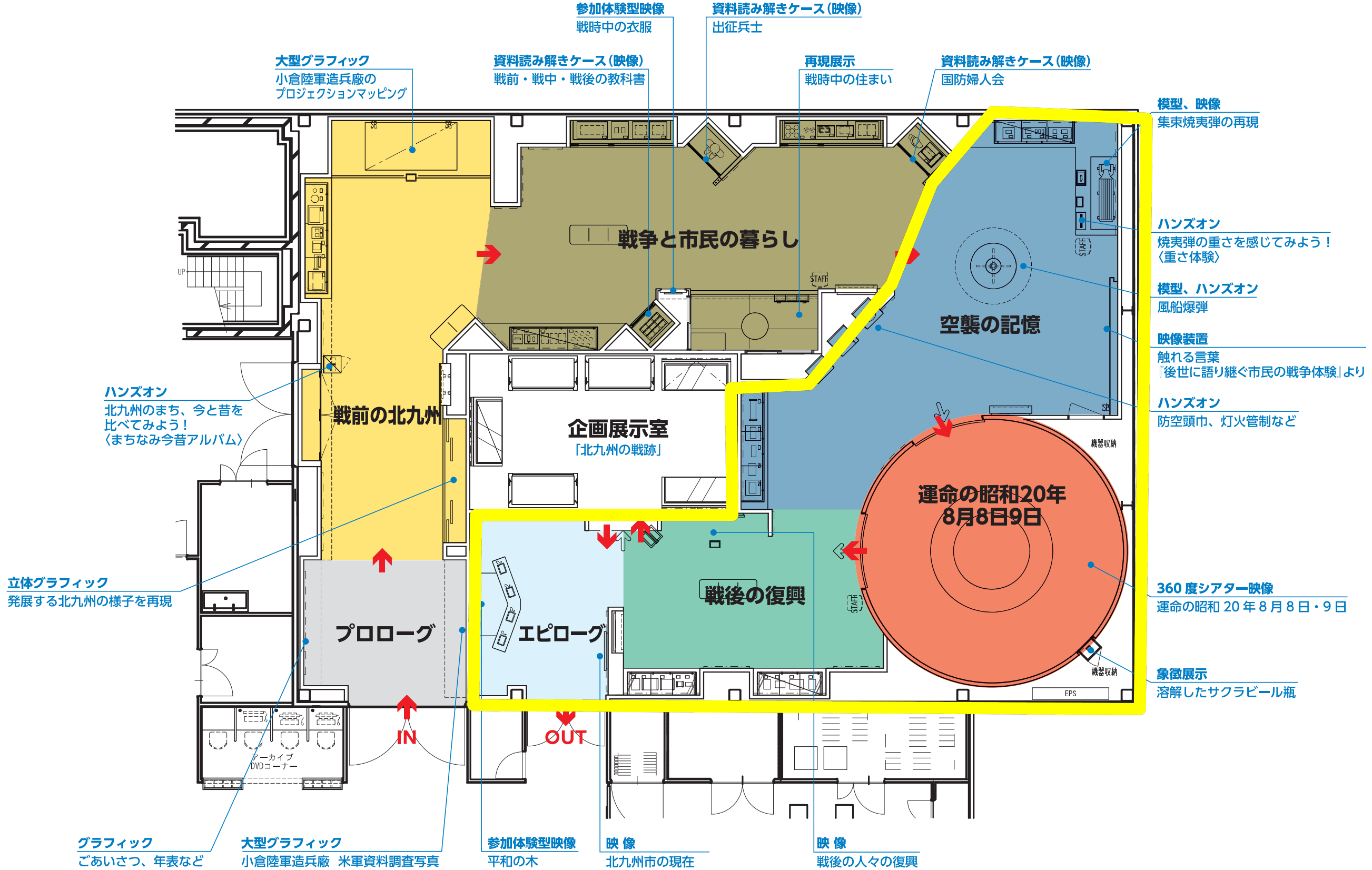
- ・（仮称）平和資料館実施設計「空襲の記憶」
- ・（仮称）平和資料館実施設計「運命の昭和２０年８月８日・９日」
- ・（仮称）平和資料館実施設計「戦後の復興」
- ・（仮称）平和資料館実施設計「エピローグ」

（仮称）平和資料館 展示概要（展示面積341㎡）

- **展示対象（年代）**：陸軍造兵廠小倉誘致のきっかけとなった関東大震災が発生した大正12年（1923年）から戦後、造兵廠の跡地で「小倉大博覧会」が開催される等、復興する旧五市が対等合併し、北九州市が誕生した昭和38年（1963年）まで。
- **展示のテーマ**：「戦争により大きく変わった人々の暮らし・まち」・「北九州の空襲、原子爆弾と小倉」・「戦後の復興」
- **展示のねらい**：「戦時下の人々の暮らしや気持ち等に思いをはせ、戦争の悲惨さや平和の大切さ、命の尊さを考えるきっかけとする」・「戦後の復興を果たし、新しいまちへ生まれかわった歴史を紹介し、まちへの誇りや愛着の心を醸成する」
- **展示の方針**：「来館者が体験・体感でき、映像・音響設備を活用した効果的な展示」・「事実在即した正確でわかりやすい展示」・「子供たちの目線に立った展示」

	区 分		展示コーナー	展 示 概 要		
	タイトル	概 要	タイトル・ねらい			
展示構成表	プロローグ（導入展示）	来館者が、改めて、資料館があることの意義を実感し、展示鑑賞への期待感を高めることができる象徴的な展示を行う。		グラフィック展示	ごあいさつ、年表、小倉陸軍造兵廠位置図（米国国立公文書館資料）等	
	戦前の北九州 （大正末期～昭和１０年）	北九州地域が日本を代表する工業都市として発展するなかで、陸軍師団や軍需施設が置かれていたことを紹介する。	【発展する北九州】 交通の要所や工業都市等、様々な顔を持った都市として発展し、活気があった“まち”の様子や市民の暮らしを知る。	実物資料展示（展示ケース）	百貨店絵葉書、新聞記事 等	
				立体グラフィック	発展する“まち”の様子を当時の写真や絵葉書を活用した再現展示	
		スクロール式資料検索システム※	【小倉陸軍造兵廠の誕生】 兵器工場である小倉陸軍造兵廠が設置された経緯、造兵廠と“まち”の関り等を知る。	グラフィック展示	造兵廠誕生の経緯、“まち”と軍との関りの解説	
				模型＋プロジェクションマッピング	造兵廠の工場模型に映像を投影したプロジェクションマッピング展示	
	戦争と市民の暮らし （昭和１０年～昭和20年）	戦時下の銃後を守った市民のくらしや子どもたちの遊び、学校生活などの日常を紹介する。	【市民のくらし】 出征する夫や息子との別れや戦時下の統制と節約の中で生きた市民のくらしを知る。	実物資料展示（展示ケース）	軍隊ラッパ、飯盒等（陸軍十二師団・小倉陸軍造兵廠関連資料） 等	
				グラフィック展示	出征、統制下のくらしに関する体験談 等	
				資料読み解きケース（解説展示）	千人針、武運長久の寄せ書き、衣料切符、各種陶磁器 等	
			【戦争と子どもたち】 尋常小学校から国民学校への移行により、大きく変わった子どもたちの生活等を知る。	兵士や国防婦人会の活動内容を軍服等の実物資料と映像を活用した解説展示		
				グラフィック展示	戦時下の学校や生活についての解説	
				雑誌、紙風船、防火双六などの遊び道具、教科書、学徒出陣冊子 等		
		スクロール式資料検索システム※		資料読み解きケース（解説展示）	戦前から戦後の教科書の内容の変化を実物資料と映像を活用した解説展示	
				参加体験型映像展示	戦時中の衣類を擬似的に着ることができる参加型体験展示	
		再現展示	戦時中の一般家庭の情景の再現展示			
		空襲の記憶 （昭和１9年～昭和20年）	四大工業地帯のひとつであった北九州地域が空襲の目的となったこと、市街地での被害や市民の戦争体験などを紹介する。	【北九州と空襲】 発展した都市ゆえに、空襲目標となった北九州の空襲被害の状況等を知る。	グラフィック展示	北九州空襲に関する被災状況、焼夷弾、風船爆弾の概要
	模型展示				風船爆弾、焼夷弾	
	【空襲と市民のくらし】 空襲から身を守るための市民の生活の工夫や過酷な体験を知る。			実物資料展示（展示ケース）	焼夷弾の破片、爆撃報告書（米国国立公文書館資料） 等	
				ハンズオン展示	風船爆弾に使われた和紙、焼夷弾の重さ体験	
	スクロール式資料検索システム※			【昭和20年8月9日 小倉・長崎】 長崎に投下された原子爆弾と小倉の関係等を紹介し、長崎での原爆により多くの人が被害にあったことを知る。	グラフィック展示	空襲と市民のくらしについての解説
					ハンズオン展示	防空頭巾、灯火管制電球かさ 等
運命の昭和20年8月8日・9日	昭和20年8月8日の空襲により、大きな被害を受けた八幡の“まち”、翌日に原子爆弾を搭載した爆撃機が小倉をめがけて北九州上空へと到来し、長崎へ向かったことなど、長崎へ投下された原子爆弾との関係について360°シアターで紹介する。		触れる言葉（参加体験型展示）	壁面に投影したキーワードに触れると戦争体験談や写真が壁面に浮かび上がる映像展示		
			グラフィック展示	原子爆弾と小倉の関係、原子爆弾についての解説		
			実物資料展示（展示ケース）	原爆被災資料（スプーン、瓦、写真等）、小倉市長檄文 等		
			360度シアター	360度映像を駆使し、音や振動などの体感システムを導入したシアター展示		
戦後の復興 （昭和20年～昭和38年）	戦後の混乱期における人々のくらしや“まち”が復興を果たし、北九州市が誕生したことを紹介する。	【戦後のくらし】 戦後の混乱期を生きた人々の様々な思いや労苦、苦難の多かったくらしを知る。	実物資料展示（埋込型ケース）	空襲によって溶解したサクラビール瓶		
				戦後の状況を示すデータ、戦後のくらしについての解説		
		スクロール式資料検索システム※	【平和へ歩み始めた“まち”】 戦後、戦災復興都市に指定された八幡市などの復興や造兵廠跡地の活用等を通して、北九州の“まち”が平和の願いを込めて復興したことを知る。	実物資料展示（展示ケース）	傷痍軍人手帳、北九州大水害写真（米国国立公文書館資料）	
				グラフィック展示	旧五市（門司、小倉、若松、八幡、戸畑）の復興についての解説	
	企画展示 （北九州の戦跡）	所蔵資料に限定せず、他都市の資料館等からの借り受けた資料を活用する等、様々なテーマで企画展を開催する。	実物資料展示（展示ケース）	平和祈念像（レプリカ）、小倉大博覧会・門司トンネル博・若戸博パンフレット 等		
			映像モニター	旧五市の復興の歩みを紹介する映像		
エピローグ （北九州市の未来のために）	明るい未来を創造するための取り組みを通して、北九州市の“いま”と“これから”を紹介する。		平和の木（参加型体験展示）	来館者の心の振り返りを記録する参加型体験展示		
			映像モニター	復興を支えた市民・企業等のPR映像 等		
			グラフィック展示	北九州市の未来に向けた取り組み（SDGs・文化・平和事業等）の解説		

※各コーナーに資料や写真等の画像検索ができるタッチパネル式情報端末を設置



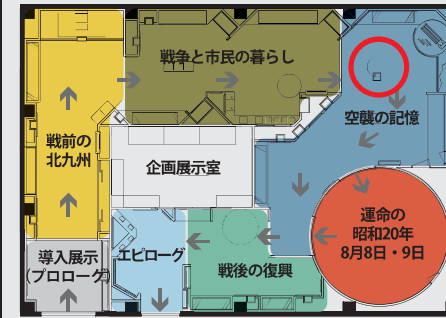
小倉陸軍造兵廠で製造された風船爆弾の模型を展示。 風船爆弾の仕組みや製造方法、その背景にある市民の過酷な労働や体験を感じる。

空襲の記憶

空襲目標となった北九州市の各種被害や市民の過酷な戦争体験、北九州における防空体制等を紹介する。

〈北九州と空襲〉

米軍の空襲目標となった北九州の空襲被害の状況等を知る。

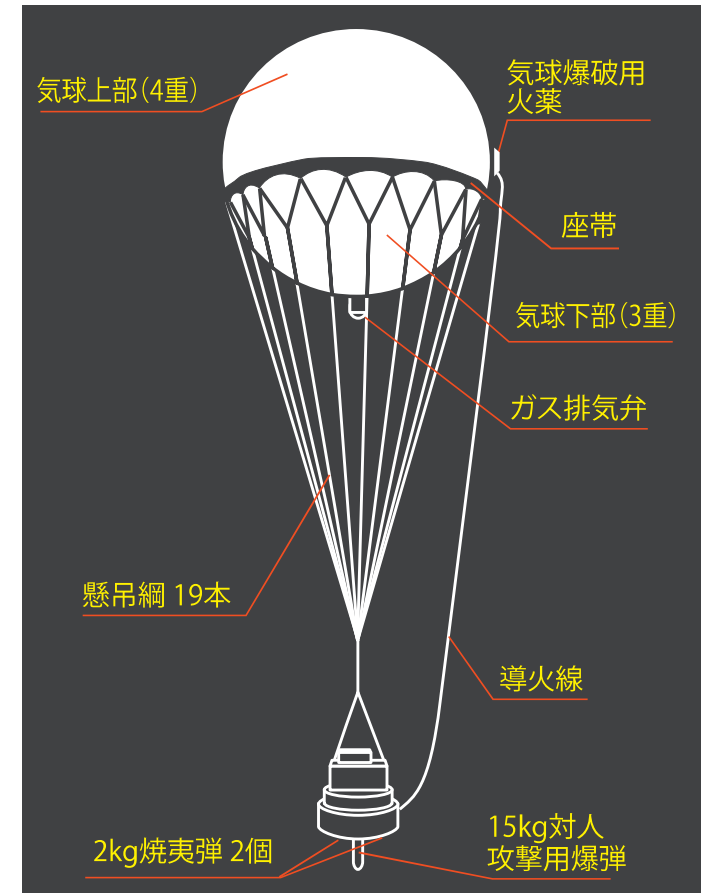


風船爆弾の再現

造兵廠で戦争末期の一時期に生産された風船爆弾の模型を実物の1/5スケール(直径2m・全長5.5m)で再現。

風船爆弾とは何か

風船爆弾の各種装置と米国本土まで到達する仕組みについて、画像を通じて説明する。



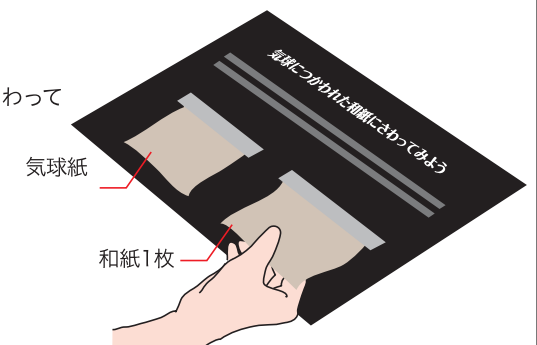
【実物資料】風船爆弾の原紙／【ハンズオン】風船爆弾の和紙

風船爆弾の気球につかわれた和紙と同等のものに実際にふれてみる事ができる展示。

●ラフイメージ

素材に触れる体験

風船爆弾の和紙をさわってみよう！



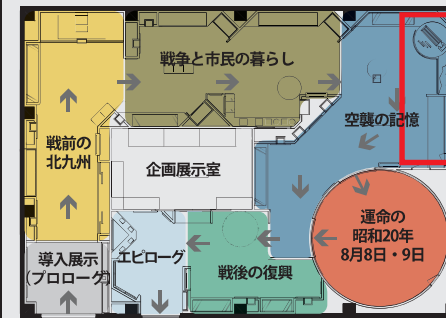
壁面に投影された言葉をタッチし、様々な証言が浮かび上がる映像装置。 市民の戦争の過酷な体験に触れる。

空襲の記憶

空襲目標となった北九州市の各種被害や市民の過酷な戦争体験、北九州における防空体制等を紹介する。

〈空襲と市民のくらし〉

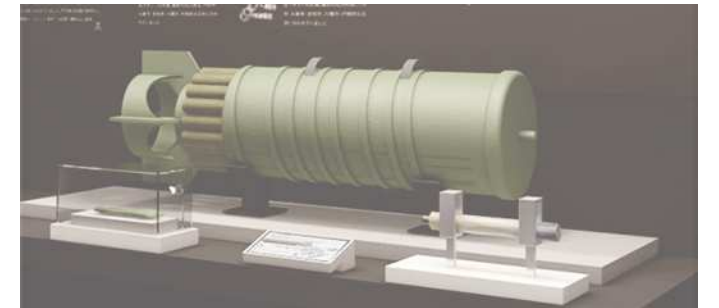
空襲から身を守るための市民の生活の工夫や過酷な体験を知る。



集束焼夷弾の再現

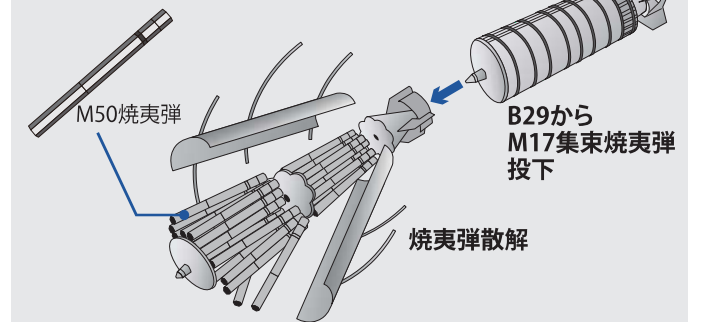
模型

構造がわかるよう再現した集束焼夷弾の模型。
市街地に大きな被害を与えたことを伝える。



●集束焼夷弾のしくみ解説グラフィック

八幡大空襲時に1,169もの焼夷弾
(M17本体M50)が落とされた。



【映像装置】「触れる言葉」

映像装置

本市が発行した『後世に語り継ぐ北九州市民の戦争体験』から、空襲の記憶を紹介する映像装置。
壁面に投影した言葉に触れると関連する写真や記録が壁面に浮かび上がるしくみ。



●ラフイメージ

数種類の「言葉」が投影され点滅している。「言葉」は、文章の一部
いずれかの「言葉」に触れると、センサーで感知。

選択した「言葉」の文章全体と関連する写真等が投影。
（「言葉」は何種類か準備し、時間によって差がわかる。）



スクロール／画像情報検索



昭和20年3月9日 小倉・長崎資料展示

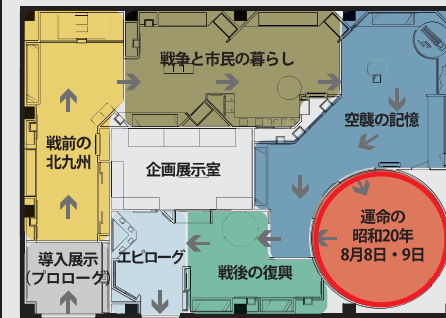
ハンズオン
防空頭巾、灯火管制など

■運命の昭和20年8月8日・9日

映像や音響技術を活用した360度シアター。
昭和20年8月8日の八幡の空襲、翌9日の原子爆弾を搭載したB29が小倉上空を飛来した後、長崎に向かった2日間の出来事を追体験する。

運命の昭和20年8月8日・9日

8月8日の八幡の空襲をシアターにおける情景再現等を通して、八幡のまちが焼け野原になり、多くの人が被害にあった事実を知る。



「運命の昭和20年8月8日・9日」

360度
シアター
映像

8月8日の八幡大空襲から9日のB29小倉飛来までの経緯を『後世に語り継ぐ北九州市民の戦争体験』などの証言を基にしたストーリー。当時の街並みと出来事をCGで想定再現し、追体験できるものとする。

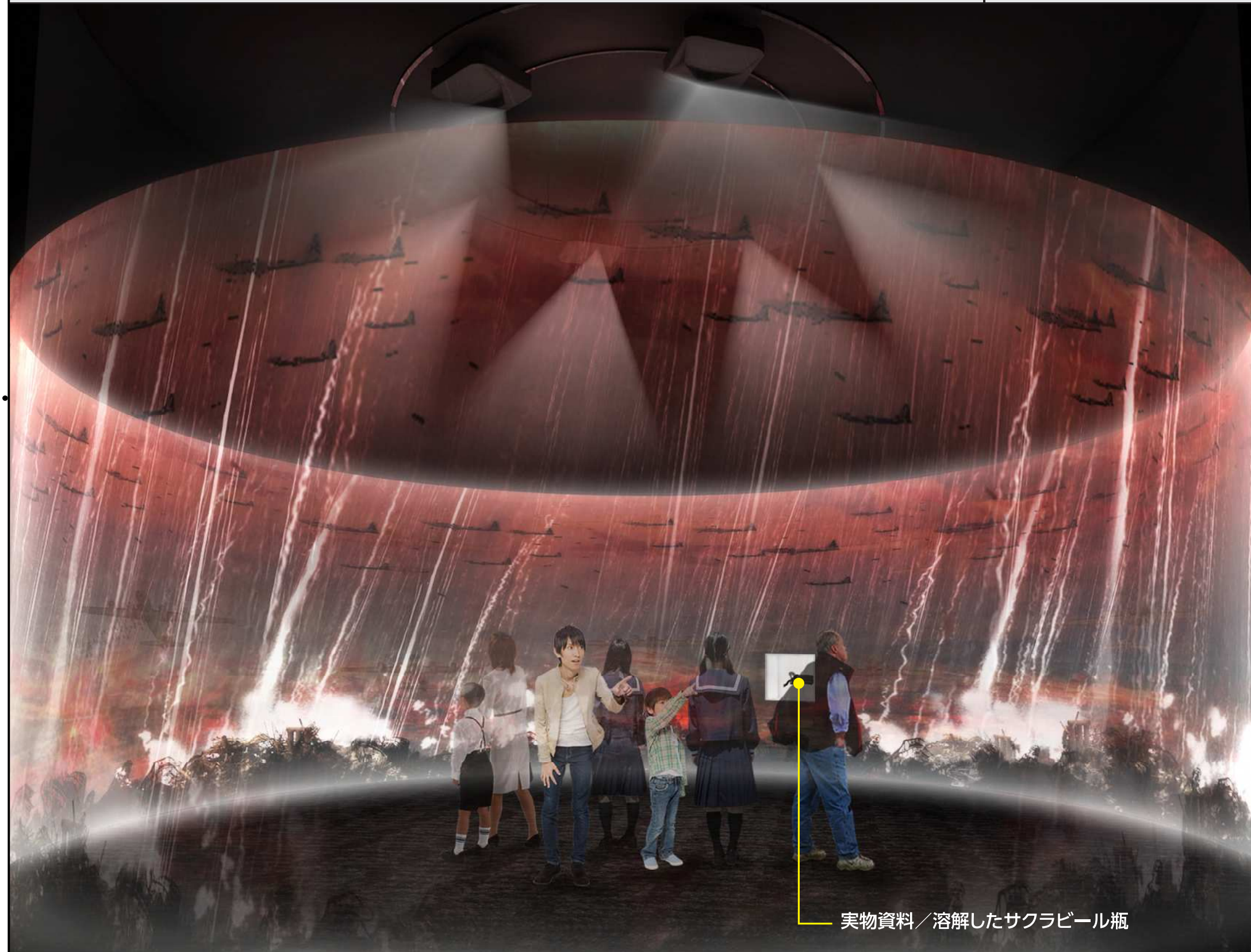
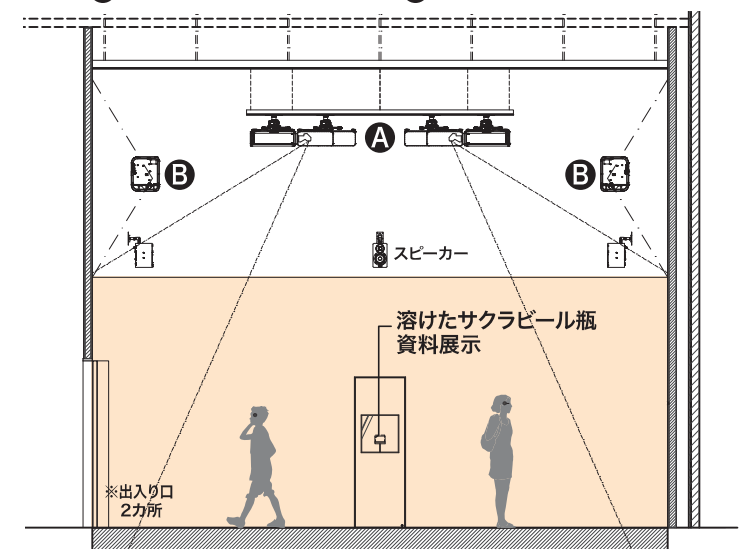
360度全周シアターで、臨場感にあふれる空襲の再現映像を床振動などの効果を用いながら投影する。

●運命の昭和20年8月8日・9日 ストーリー

- 1. プロローグ** 昭和20年8月の北九州・・・小倉や八幡で生活する人々にとって、戦時下ながら普段通りの生活があった。
- 2. 8月7日～8日** 八幡の人々が寝静まった時、遙かテニアン島では焼夷弾を満載したB29の大群が日本へ向けて離陸の準備をしていた。
- 3. 8月8日の朝** 大詔奉戴日の8日の朝、学校に向かう子どもたちや勤労奉仕で小倉陸軍造兵廠へ向かう学生など、いつもの朝がそこにあった。そして朝10時、B29の大群が八幡の空に現れた。
- 4. 空襲** 容赦なく降り注ぐ焼夷弾の雨、家屋は燃えさかり人々は熱さに逃げまどった。防空壕に逃げた人たちも決して安全ではなかった。
- 5. 空襲後の静寂** 1時間後、B29が去り残されたのは、煙にかすみ焼野原と化した八幡の町だった。
- 6. 8月9日 朝** 前日の空襲の煙がたなびく、北九州の空に3機のB29が現れた。いぶかしく見上げる人たち。やがてB29は小倉の空から、次の目標である長崎へ原爆投下のために向かって行った。

●シアター全体イメージ

●A 壁面投影 プロジェクター/6台 ●B 上部壁面投影 プロジェクター/2台



■戦後の復興（平和へ歩み始めた“まち”）

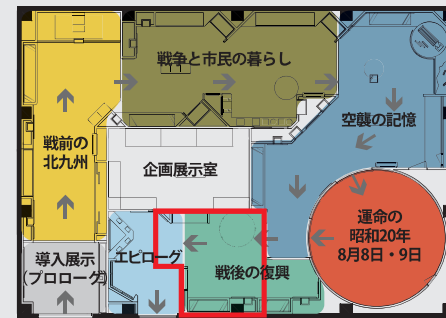
旧五市（門司・小倉・若松・八幡・戸畑）が復興への歩みを進める姿を伝える映像モニター。
再び発展し、北九州市が誕生する“まち”の移り変わりを感じる。

戦後の復興

戦後の混乱期の人々のくらしや復興を通して、北九州地域それぞれの“まち”が平和の
願いを込めて生まれ変わり、北九州市が誕生したことを紹介する。

〈平和へ歩み始めた“まち”〉

戦災復興都市に指定された八幡市などの復興や造兵廠跡地の活用等を通
して、北九州の“まち”が徐々に活気を取り戻してきた過程を伝える。



【映像装置】「戦後の人々の復興」

映像

戦災を受けた北九州旧五市が復興していく様
子を学ぶことができる。
手元で地域を選択すると、北九州各地域の解説
映像が壁面モニターに流れる。

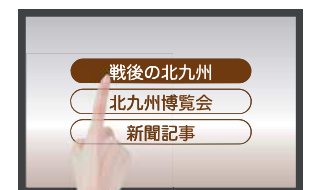
イメージ



画像情報検索装置

タッチパネル
モニター

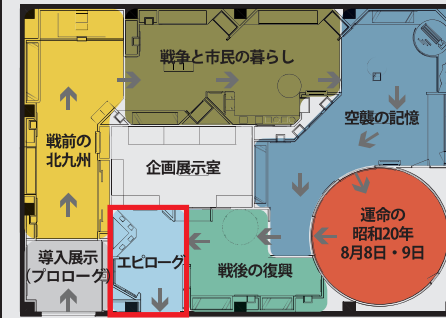
画面をスクロールするこ
とにより、興味のある分野に
ついて、より深く知ること
ができる。
4箇所に設置。



タッチペンで感想を書き込める参加型体験装置。来館者の心の変化を感じる。

エピローグ（北九州市の未来のために）

明るい未来を創造するための取り組みを通して、北九州市の“いま”と“これから”を紹介する。



【参加型体験装置】「平和の木」

インタラクティブ
映像装置

タッチパネルに表示された葉っぱにタッチペンで感想を書き込むと文字がデジタル化され、その感想が書かれた「葉」が、壁面に表示された「平和の木」の葉となって表示。



最初は枝だけだった「平和の木」は、徐々に来館者のメッセージが書き込まれた葉で豊かな美しい樹に変化する。



70 インチモニター

10 インチタッチパネル



エピローグ・平和に向けた取り組み

グラフィック

戦争の悲慘さや平和の大切さを市民に伝える北九州市の取り組みを紹介する。



北九州市の未来に向けた取り組み

復興を果たし、五市が合併し誕生した北九州市は高度成長の中で発展する一方で公害問題を克服してきた。そのような時代を支えた市民・企業の活動や未来に向けてSDGsや文化創造等、北九州市の“いま”と“これから”を紹介する。

議題（１）－２

コンセプトに基づく展示内容の整理について

（説明資料）

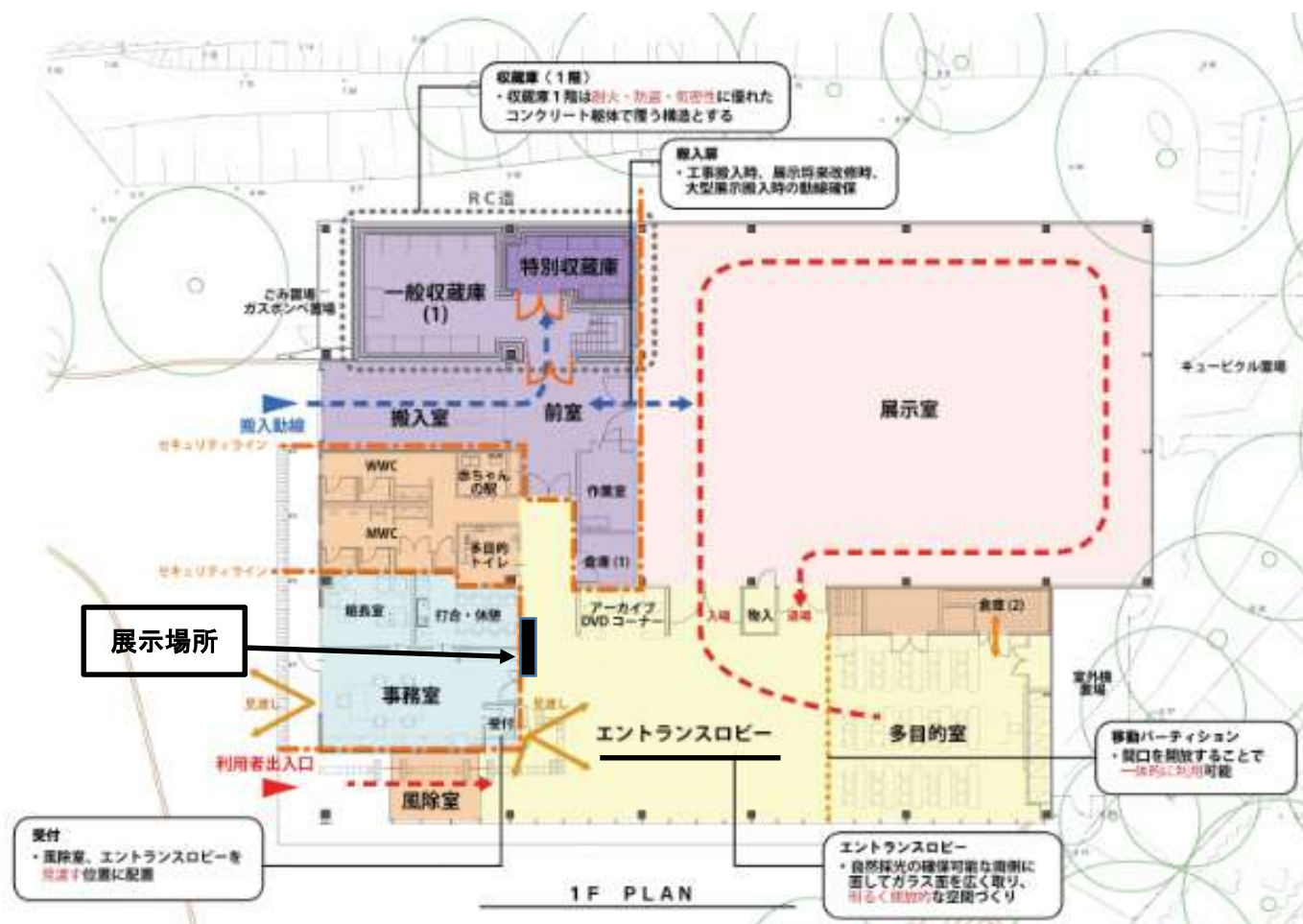
- ・ 北九州市非核平和都市宣言の展示

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

○案2：エントランスロビーで展示

入館者の目に触れる機会が多い、受付付近に宣言パネルを展示する。

【参考：全体平面図】



【参考：展示例】

北九州市非核平和都市宣言

核兵器の廃絶、恒久平和の実現を希求する北九州市は、北九州市発足の日にあたる2月10日に、平和に対する理念を示す「北九州市非核平和都市宣言」を実施しました。

非核平和都市宣言は、平和な世界の実現のために、市が市民の皆様とともに、前進していく決意を示すとともに、宣言都市が互いに手を結び合い、国内外の都市に賛同と協力を呼び掛ける役割を果たすものです。

■北九州市非核平和都市宣言

平和な世界の実現は、人類共通の願いです。

私たちの国、日本は、世界で唯一の核兵器の被爆国として、この地球上で再び広島や長崎の惨禍を繰り返してはならないことを、世界の人々に強く訴え続けてきました。

私たち北九州市民は、長崎に投下された核兵器の第一目標が小倉であったことを重く受け止め、核兵器の恐ろしさ、戦争の悲惨さ、平和の尊さを、次の世代に伝え、核兵器のない、戦争のない、平和な世界を築いていかなければなりません。

よって、私たちは、命と平和の大切さを深く認識し、核兵器の廃絶と平和な世界の実現のために歩み続けることを誓い、ここに北九州市を非核平和都市とすることを宣言します。

平成22年2月10日北九州市

議題（２）

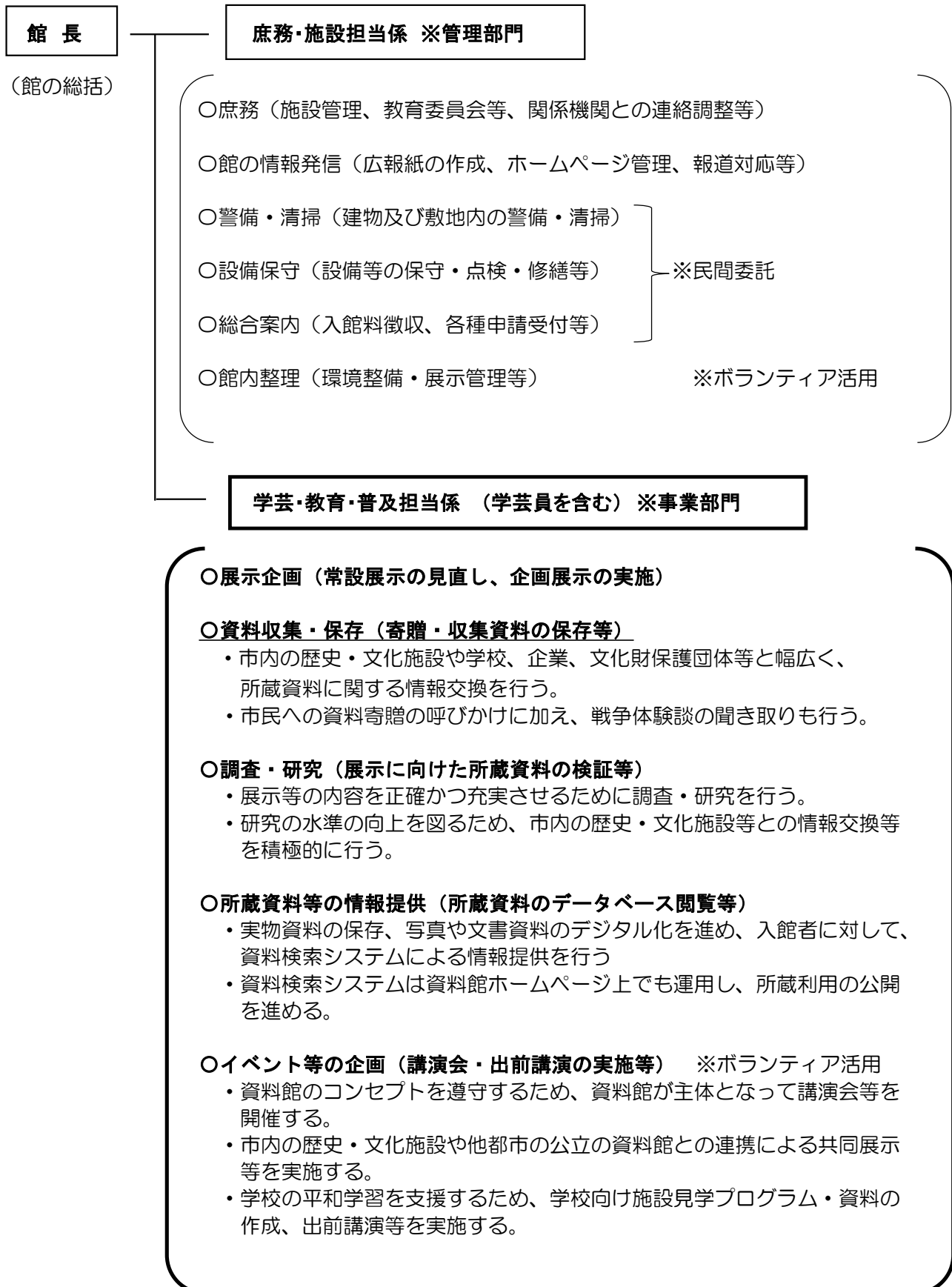
（仮称）平和資料館の管理・運営について

（説明資料）

- ・ 管理・運営体制について
- ・ 資料収集について

(仮称) 平和資料館の管理・運営について (案)

1 管理・運営体制



戦時資料の収集について

1 戦時資料の収集

（仮称）平和資料館は「市民の戦争体験や当時の暮らしを物語る資料などを保存・継承していく」ことをコンセプトにしている。

そのため、市民に対して資料の寄贈の呼びかけや学校や企業博物館、図書館等に照会を行う等、戦時資料の収集を進めている。

また、市民から募集した戦争体験談から印象的な証言をピックアップした展示を予定している。

2 具体的な資料収集の事例

資料例	収集方法	展示（保存・記録）方法
■実物資料 - 日常生活用品（配給切符、紙幣、国民服等） - 教育・子ども用品（玩具、学用品等） - 軍装品（軍服、軍隊手帳等） - 軍隊生活用品（水筒、慰問袋、寄せ書き等） - 代用品（陶製、紙製、竹製等） 等	公 募	- 実物展示 - 画像検索システムで閲覧（画像データ化） - アーカイブコーナーで映像視聴（映像データ化）
■写真資料・映像資料・音声資料 - 戦中、戦後のまちの風景写真 - 戦争中のニュース映画、記録映像 等	公 募 調 査	
■図書資料・文献資料 - 戦時中の新聞、ポスター、雑誌 国、地方公共団体が出版した図書、公文書 - 国内外の類似施設が保管している資料	調 査	
■市民の戦争体験談（冊子・インタビュー映像）	公 募	- アーカイブコーナーで映像視聴 - 冊子の閲覧・配布

【参考：資料収集の呼びかけ】※市役所ホームページより

戦災遺品、写真等をはじめ、戦時下（戦前・戦中・戦後直後の動乱期）における芸道の市民生活を知ることができる戦争関連の資料を募集しています。

【収集対象】

- ・八幡大空襲をはじめとする本市の空襲に関する資料
- ・小倉造兵廠に関する資料
- ・戦後の復興が分かる資料
- ・戦時下の市民の暮らしが分かる資料

3 戦時資料収集の視点

資料館が戦時資料の収集を進めていくため、以下の視点で意見を聴取する。

（視点）

- ・戦時資料収集に向けた、市民への働きかけ及び関係機関との連携の進め方
- ・資料収集のためのルールづくり
- ・戦争体験談の収集・保存、来館者へ効果的な伝え方

【参考：収集資料の例】

■学校等から入手（戦前からある学校の記念誌等から戦時下の写真をピックアップ）



▲ 昭和10年代頃 学校敷地内での防空壕設置
（西南女学院）



▲ 昭和15年頃 東方遙拝（天神小学校）



▲ 昭和18年頃
園児ガスマスク訓練
（小倉幼稚園）

■市民からの寄贈（実物資料）



▲ 千人針



▲ 昭和初期のマッチ箱



▲ 兵士図柄等の子供向け茶碗



▲ 第二次世界大戦時の国威発揚紙芝居